

名小路弥生先生を偲んで

和田一義（女子中学校・高等学校教諭）



名小路弥生氏略歴

一九二三年八月八日生まれ。一九四三年日本体育専門学校女子部を卒業後、私立東京都小石川高等女学校、都立東京第二十高等女学校を経て、四五年同志社に教諭として入社。七三年依願退職。
一九九八年四月一日永眠 七十四歳。

昨年の春、四月十四日、天国に召された名小路弥生先生は、昭和二十年九月より、現同志社女子中学校・高等学校の前身である同志社高等女学校に教諭として就任され、昭和四十八年三月まで二十七年七カ月の永きにわたって本校教育のために尽くされた。

先生は昭和十六年に本校を卒業された大先輩で、その後、日本体育専門学校女子部を卒業され、小石川高等女学校、東京都立第二十高等女学校を歴任後、母校である本校に就任されている。

私は昭和三十八年に専任教員になったのだが、十年余にわたってご指導を頂いた。その二年前、先生は御出産のためにお休みになり、そのかわりとして非常勤の講師に呼ばれた。もちろん、私はダンスを教えることなどできるわけがないので、マット、跳び箱、鉄棒などで先生の

お休みの間をしのいだ。

先生は、流派は忘れてしまったが日本舞踊の名取でもあられた。時々体育の先生仲間一度先生の踊りを拝見したいと話が出ていたが、とうとうその機会をみつけることができず残念であった。

昭和四十二、四十三年頃と思うが、先生は生活指導部の副主任としての重責を果たされている。卒業生に聞くと、日頃は柔和で、いつもにこにこ笑顔のたえない穏やかな先生であったが、ダンスの授業のかたわら、生徒たちには、礼儀作法、躰の点ではとても厳しかったようである。私たち後輩の教師にはいつも優しく接していただき、当時は家族ぐるみのおつき合いをしてくださった。山科にお住まいのときに二度、大津に新しく邸宅をお建てになってからもお招きを頂いた。美味しい家庭料理もご馳走になったから

いうわけではないがとても家庭的なご婦人であられたことを思い出す。

また年月は忘れてしまっているが、それぞれの家族が車四、五台を連ねて湖南アルプスの方へ松茸狩りにでかけたのも楽しかった思い出の一つである。

先生はご主人のお仕事（公務員）の関係とお子さまの教育との関係から若くして、突然退職されてしまったので残されたものは戸惑い、何度も電話でご相談を持ちかけ、ご迷惑をおかけすることが度々であった。

御退職後も何回かはお目にかかり、お元気に過ごされているものとばかり思っていましたのに突然の訃報に接し、驚きました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

恒藤武二先生を偲んで

吉田宜路（名古屋学院大学経済学部教授）



恒藤武二氏略歴

一九一九年八月三十一日生まれ。一九四三年九月同志社大学法学部を卒業後、四十六年同志社大学に助手として入社。四十七年法経学部助教授、五十二年法学部教授。九〇年名誉教授。六一年四月、六十七年四月には法学部長を兼任。七一年には永年勤務者として表彰を受けた。一九九八年四月二十九日永眠。七十八歳

今は亡き恒藤先生は生涯を通じて合理性を重んじられました。しかし、それは無機質で機械的なものではなく、実に豊かな精神性を含み、時にみせられる反骨精神は御父上譲りともいえましようか。先生は御自分を律することにはことのほか厳しく、弟子に対する思い遣りは深く、私のような不肖の者にも励ましをかけて下さいました。三十五年前私のドイツ留学のおり、先生は横浜港の埠頭にまでおみえになり、甘いものの好きの私に風呂敷包みに入れた羊羹を手渡しして下さいました。外国への独り旅を少し不安に思っておりました私への心のこもった励ましでした。

あるきっかけを境に、私は先生の前で自分を飾る必要はなく、自分をそのままに示せばよいと知ってから、何か先生に素直に対処させていただくことができる

ようになりました。あれから四十有余年、先生の慈しみを有り余るほどいただきました。私が研究者の道を選ぶことに迷い、先生に御相談をいたしましたとき、先生は大学の先生職は難しいことではないと話されました。しかし、その真意は恐らく、どのような学者研究者になるかが問題だと私に伝えたかったに違いありません。私が学問を志して久しく、この間、先生は御自分の思想信条を私に勧められたこともあり、私がそのように感じさせられたことは唯の一度もございませんでした。しかし、学問研究を志す者が守らなければならぬ最も深いところにある一点は厳しく教えられました。

学問研究への厳しさとは対照的に、御趣味では多方面にわたり自在さを発揮されました。先生のテニス好きは酷暑はもちろん、ボールが撥ねない雪中にまでお

よび、冬、比叡山が雪景色になりますと御一緒に蛇ヶ池に急ぎスキーを楽しまれ、また夜を徹しての囲碁は先生の楽しみの一時でした。パロディー創り、悪戯書きも先生の知られざる楽しみの一つでした。先生は大工仕事がことのほか好きで、御自分で家を建てるのが生涯の夢のようでした。

このように、先生の合理性の内側には温かいお気持と豊かな魅力が充たされておりました。私は今日まで多くの人との出会いがありましたが、私の生涯にとりまして先生との出会いは他に代えることができません。奥様をはじめ御家族の皆様からも暖かく遇せられ、ここに多くを語りえませんが、今ここに私があることの意味を感慨をもって想っております。先生の御冥福をお祈りいたしますとともに、奥様の御健勝を念じてやみません。

前川恭一先生を偲んで

太田進一 (大学商学部教授)



前川恭一氏略歴

一九三〇年八月二日生まれ。一九五六年京都大学経済学部を卒業後、五八年大阪市立大学大学院経営学研究科修士課程修了。六一年同志社大学商学部助手として入社。六二年専任講師、六四年助教を経て七〇年教授。商学部長、学術情報センター所長を歴任し、また、法理事として学校運営のため力を尽くされた。一九九八年五月一日永眠。六七歳。

前川先生は、一九九八年五月一日に惜しくも他界された。前年の十二月には、著書の『日独比較企業論への道』をベツド上で校正され、出版された。編著や共著と合わせると十三冊目になる。学術会議会員として、最後まで学問の道を全うされた方である。その後元氣になられ、五月の連休には退院されて何人かの方々が休み中に電話をもらっており、それだけに訃報に接して驚かれた方も多かった。

この五月には『同志社商学』で追悼号が刊行される予定で、研究業績が掲載されるが、ことに、経営学博士号を授与された『ドイツ独占企業の発展過程』の研究は、今日でも高く評価されている。先生は、日本経営学会や他学会の理事も多く務められ、学内では、二期にわたる学部長、学療法同志社理事を務められた。大学コンソーシアム京都の運営にも委員長とし

て携わられ、また、民主的な運動でも指導的な立場にあられた方である。追悼式で野本真也先生が前川先生の若き日の詩を紹介されたが、詩人でもあった。元学長の笹田友三郎先生や吉田敬一君（東洋大学教授）の弔辞にもあったとおり、前川先生の全てを把握することは難しい。

私は、前川先生が本学商学部に着任された翌年の一九六二年に初めてゼミを担当された際の第一期生である。当時、私は竹林庄太郎先生を顧問とする学術団「中小企業研究会」に所属していた。大学一年次の秋に渉外係として研究会主催の講演会に藤田敬三博士をお招きした際に前川先生に初めてお会いした。藤田先生は、前川先生の修士課程での指導教授であった。ゼミ登録の際、竹林先生が国内留学で休講だったので前川演習をとった。ゼミ生には、弔辞を読んだ太田垣元朗君（尼

崎戎神社主）のように、神戸商船大学から同志社大学へ転学してきた学生や、二浪生などもおり、前川先生との年齢差もそれほど開いておらず、いわば兄貴分の存在であった。私は現役入学だったので、前川先生と同じ干支の午年で一回り違いであった。ゼミ生と共によく河原町界隈を飲み歩かれた。先生の包容力で、ゼミには多様な人材が集まったが、スポーツ選手も多かった。ラグビーの大八木敦史、陸上の朝原宣治や早狩実紀、相撲の土佐ノ海（山本敏生）、シンクロナイズドスイミングの立花美哉などもゼミ生だった。前川先生のにこやかな笑顔と、柔らかな関西弁が今でも頭に残っているが、人を説得し動かす力を持っていた方で、学問に諸事に、精一杯最後まで力を尽くされた。惜しい方を亡くしたと思う。前川先生、どうか安らかにお休みください。

守本浩先生を偲ぶ

松井邦光（大学名誉教授）



守本 浩氏略歴

一九二五年八月二〇日生まれ。
一九五〇年京都大学理学部数学科を卒業後、
私立高槻高校教諭、大阪府立大学助教を経て
六九年同志社大学に工学部教授として入社。
一九九三年同志社大学名誉教授。
一九九八年七月二十八日永眠 七十二歳

故守本浩先生は昨年七月二十八日、七十二歳の高齢とは決して思えない年齢をもって突然に逝去されました。謹んで御冥福をお祈り致します。

守本先生は一九五〇年京都大学理学部数学科を卒業され、私立高槻高校に奉職、熱心に学生を御教導され、その忙しい最中にも、微分方程式の摂動論の研究に専念され、以後大阪府立大学に栄転、摂動論より転じて人間の考えを機械に再現される試み（現代流に言えば機械言語のはしり）ともいべき重要な研究に没頭され、一九六九年同志社に着任されている。以後教務主任、一般教育委員、研究室主任、学生主任、同和教育委員、入試委員等々幅広い分野で活躍され、一九九三年名誉教授の称号を授与されている。

守本先生と私との出会いは、先生が工学部教授として就任されるまでは、大先

輩である事以外何も存じ上げていなかったが、着任時以来先生とのおつきあいは三十年間にも及んでいる。同じ工学部の一員であり、入試委員会等々種々の会議でお会いする機会も多く、また年齢の差も余り大きくない事もあって特に親しくさせて頂いた事に深く感謝している。何時もにこやかに話をされ、先生独特の広い視野をもつ話題の豊富な方で、懐しい思い出として私の記憶に残っているだけでなく、教えられる事の多い方であった。この様な先生であるから、教室での先生はきびしい一面をもったやさしい先生であった様に思われる。特に大学紛争時、過激派学生に対しては対決する所は妥協せずつねに対決し、しかも温かい思いやりをもつて接しておられたお姿が非常に印象深く思い出されるのである。同志社を定年退職された後、少くない大学から

望まれて非常勤として忙しくされていたが、小生とは偶数月には必ず一度はお目にかかって楽しく話をさせて頂いたものである。その間先生はともにお元気で数学の歴史とか未来の展望とか種々なお話を伺ったものである。

御元氣な先生であったが亡くなられる三週間前腎臓に障害がある事が判明したが、入院したり注射をしたりする事を嫌がられ、御自宅で療養されていたが、医者も驚く程の思いがけない病の急変により腎臓機能障害で安らかになくなりましたとの事である。小生としては信じられない訃報であった。

御生前先生の諸先生の話をよくされ、「あの時清水辰次郎先生はこういわれた、あゝいわれた」となつかしそうに思い出されて話されていた。その先生がもうおられないとは誠に寂しい限りである。

赤尾秀之助先生を偲ぶ

濱里満典 (元香里中学校・高等学校教諭)



赤尾秀之助氏略歴

一九一九年二月五日生まれ。一九五一年京都大学文学部を卒業後、同志社香里中学校・高等学校教諭として入社。八四年定年退職。一九九八年九月四日永眠七十九歳

心優しい人でした。争いを好まない方でした。出る杭をそれと分かる形では、敢えて打たないお人柄でした。

私の同志社香里への赴任は、先生のご尽力あつてのことでしたが、生意気で鼻持ちならぬ若僧の私にただの一度も叱責の言葉はありませんでした。

或るとき、「山本周五郎をどう思います？」とさりげなく質問なされたことがありました。不遜にも読みもしないで大衆小説家と決めつけていた私は、今では冷や汗ものの言葉で誤魔化しを決め込んだように記憶しています。それを恥じたのは、随分時を経てからでした。

「先生は、周五郎の弱者やはぐれ者への温かい視線がお好きだっただけでなく、ある意図をもって質問されたのだ。国語教師でありながら極度に読書量の少ない後輩を読書の世界に導くには、中味も文

体もこれが最適だと判断されたのではなからうか。そう考えるようになったのは、ある契機から周五郎を片端から読み漁り、弾みがついて他の世界へも読書の広がりが増し始めてからでした。

先生は、近世が専門でしたから、歌舞伎や文楽には造詣が深かったのですが、或る日突然「下町の玉三郎を観てきました。あれはあれでなかなかのもんですよ」と呟かれました。梅沢富美男がそう呼ばれていることすら全く知らない時期のことでした。きょとんとしている私に、にこっと笑われただけで、それ以上何もおっしゃいませんでした。玉三郎売り出しの頃でしたが、それには一言もなさらず、『下町の』をわざわざ観に行かれて紹介されたのです。梨園の名優達をこよなく愛された先生が、名に弱い後輩達に、「世界は広いよ」と諭したかったのでしょう。

私も付き合いで、気の進まないまま若い日のある喜劇俳優を観に行つてその演技力に驚かされた経験はありますが、自ら進んでぽつと出の一座俳優を観に行く気にはとてもなりません。

過日、共済と組合連合のお世話で、玉三郎の「つう」を観る機会に恵まれました。その美しさに見惚れながら、先生を偲びました。「古典や伝統芸術をこよなく愛しながらも進取の気風は若者を遙かに凌いで居られた」と。今にして思えば、温顔に包まれた先生の反骨精神のさやかな表出だったと言えるかもしれません。てれ屋の先生からたったの一度きりではありましたが、「切られ与三」を演じて頂いた記憶が耳朶と喉に残っているのがせめてもの慰めです。

感謝の念を込めて、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

西邨辰三郎君のことば

大江直吉（元本部職員）



西邨辰三郎氏略歴

一九〇八年九月二一日生まれ。一九三二年同志社大学法学部を卒業後、五〇年同志社香里中学校・高等学校教諭として入社。六六年から教頭を兼任。七四年定年退職。一九九八年一〇月九日永眠 九十歳

西邨辰三郎君は去る十月九日（九十歳）の天寿を全うして天国に旅立れた。

西邨兄の生涯は、やはり香里中高の「法人同志社」への移行と共に始まると言つてよいと思う。そしてその生涯を香里中高の先生として教育に捧げられたのである。

西邨君は昭和二十五年、同志社中学の教師として、同志社に入社され、翌年、同志社が現在の香里中高の前身、偕行社を引き受ける事になった際に山田貞夫先生（校長として）と共に、西邨君は十名の同志社中学生を引き連れて香里に赴いたと聞いている。そして現在の香里中高校の基礎を築いたのである。それは同志社創立の時代の熊本バンドの感を抱かされるのである。以来、定年になるまで教師として、或は副校長として、その青春の情熱を教育に注ぎ込んだのである。

西邨君を偲ぶ時には、二つの面があると思う。一つは西邨君の得意の分野の音楽の面であり、他の一つは「民芸運動」に携わり、その発展と普及に尽力をされた面である。

音楽の方は同志社大学生の時代から「グリークラブ」「プリムローズクラブ」の指揮者として活躍、香里時代は「香里グリークラブ」を設立、また、香里を定年後には毎年「テノール」の独唱会を開いて、その美しい歌声を聞かせてくれた。

他の一面は柳宗悦氏の指導の下に、昭和二十三年に「京都民芸協会」が設立されるといち早くこの運動に共鳴、参加、後には京都の民芸協会の会長として民芸の普及と発展に大活躍をされたのである。

過日開かれた「故西邨辰三郎先生を送る会」は弟子達に依って栄光館で営まれ

たが、音楽葬であった。日本民芸館の現館長である柳宗悦先生の令息が東京より参列され、西邨兄の民芸運動に対する功績を讃め、たたえられたのであった。

人は死して「余韻」を残す人と、残さない人があるというが、西邨君は死しても余韻を残す人であった。

天上にあつて安らかならむことを。